学芸活動だより　第143号

ふるさと奥尻通信

令和7年3月31日
奥尻町教育委員会発行
事務局：01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。 奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭言

時代と共に町並みは変化していきます。寂しい気持ちもありますが、人がそこで生活している証でもあります。残されたものから往時を忍び、思い出を大切にしていきたいものです。

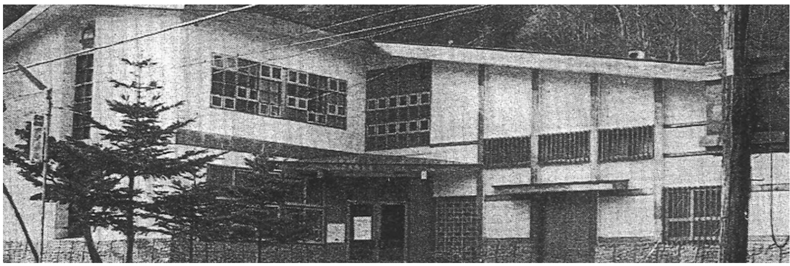
特集　奥尻公民館

今回は、奥尻町で社会教育事業の中核を担った奥尻公民館の歴史を簡単にご紹介します。

この公民館は、奥尻町字奥尻806番地の奥尻町役場真横にありましたが、ついこの間の2月中旬に解体され、更地となりました。というのも、ここはホテル建設予定地となっており、それに向けて旧役場庁舎とともに解体、撤去されたものです。

建物の位置関係としては、建物裏手に澳津神社、山手側に消防署、海手側に町役場、向かいに銀行と駐在所がありました。奥尻町の中でもちょうど中心部に所在していたことになります。公民館建設の契機となったのは、実は自然災害によるものでした。海と山に囲まれた奥尻島は自然の力に左右される土地柄ですので、太古の昔からその恵みとともに、時には大きな災害を受けてきました。

人口増加のピークとなっていた昭和30年代を見てみると、昭和37年の長雨水害、昭和38年5月の大火、9月の長雨水害、昭和40年の融雪による河川決壊などと奥尻島を襲った災害が連続しています。



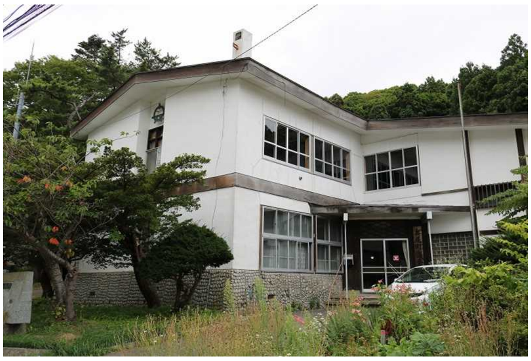
速やかに災害後の商店街や住宅再建といった街づくりが行われ、結果的に奥尻市街地は戦前期の建物が一掃された新しい様相となりました。

また、全国から寄せられた義援金を基金の一部として、社会教育事業を担う中心地として奥尻町公民館が建設され、昭和40年5月20日に上棟式を迎えました。ここには教育委員会の事務局が置かれることとなり、式典での上埜　賢町長は、「まさに社会教育センターとして本町の将来を担う青少年の健全なる育成、さらには成人研修の殿堂として広く村民に活用され」と述べています。

完成後は、社会教育の場として、青年団体や婦人団体に外部講師を交えた学習会、講演会が数多く開かれたほか、成人式会場となるなど、頻繁に利用されました。

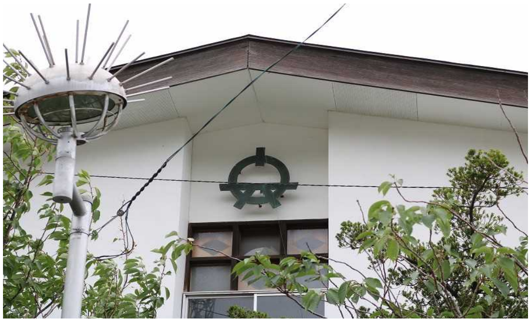
また、島内で結成された数多くのサークルの活動場所として整備が進み、町民による文化祭会場や、書道・絵画などの作品展示の会場としても広く利用されました。他に、補助金などにより「世界文庫」という図書室が置かれ、利用者の増加と共に蔵書数も徐々に増えていきました。

こうして社会教育事業の中心地として奥尻公民館が長らく利用され、1993年の地震を経て、1996年に奥尻町海洋研修センターが竣工するまで使用されました。その後、公民館は町議会の議場及び事務局に転用され、2024年5月に新庁舎へ移転するまで使用されました。こうして約60年ほどの役目を終え、今回の解体によって残っていたプレートが外されたことにより「奥尻公民館」の名は消えることとなりました。外されたシンボルマーク（村章か）とプレートは、歴史資料として保管していくことにしています。

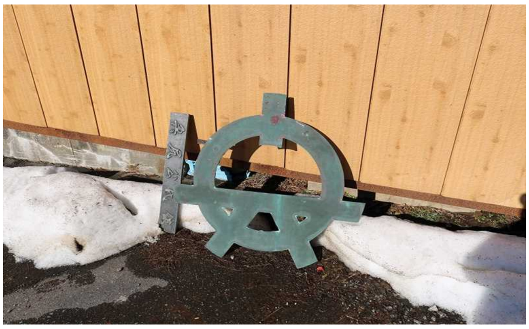


在りし日の建物（議会時代）

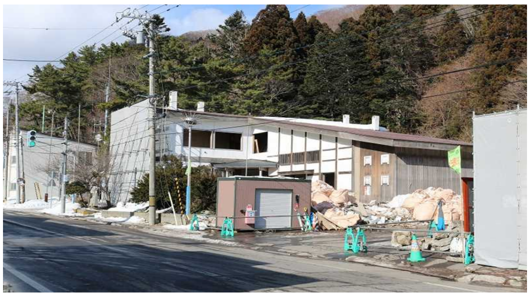
1階	2階
講堂（40坪）	婦人研修室7.5坪
料理実習室（8坪）	郷土資料室5坪
応接室（7坪）	視聴覚室3坪
事務室（8坪）	青年研修室7.5坪
ホールその他（48坪）	小会議室12坪
	図書室8坪



建物側面にあったマーク

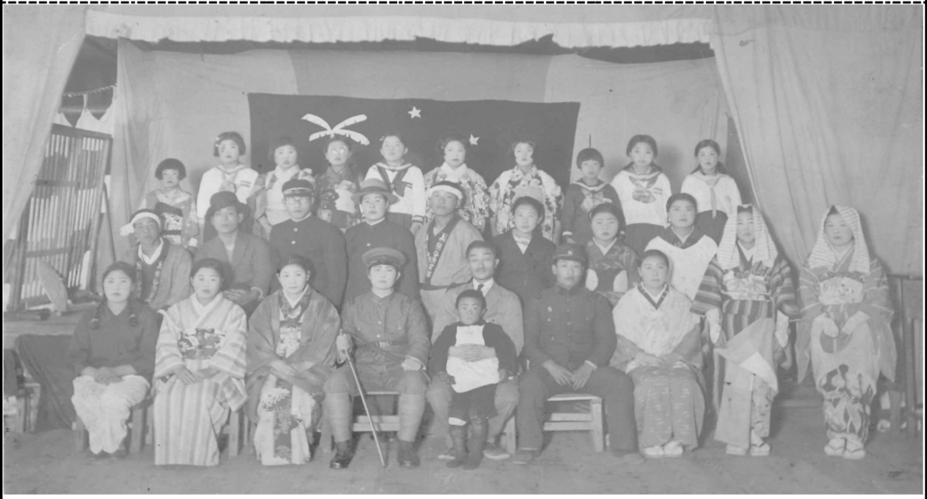


回収したマークと銘板



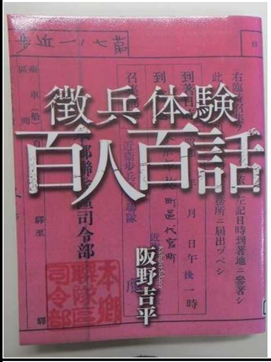
解体中の様子

奥尻写真語　第60回　出征遺家族慰安演芸会



写真の上端に「昭和十四年四月十日薬師女子青年団出征軍人遺家族慰安演芸会」と題名がつけられた写真です。裏書きには「赤誠」、「喜んで下さい兵隊さんよ　皇軍勇士の御健康を祈る」、「勇士よたのむぞ　しっかりやれよ」、「元気でお働きください」などと女性の字で書かれています。当時の慰問便りを見ると、昭和１３年2月に薬師村の河野要らが召集され、壮行会では薬師の女子青年団30名が軍歌を合唱して盛んに元気づけたとあります。しかし、河野は徐州会戦に参加後に病没し、11月に盛大な村葬が行われたとあります。銃後の人々は慰問の役割もあったわけです。

学芸員の本棚　60冊目



学芸員オススメの一冊をご紹介します。本は海洋研修センター図書室で借りられます。

徴兵体験百人百話
阪野吉兵

山形県置賜地方に在住する、兵役経験者の聞き書き集。明治40年代～昭和5年頃に生まれた男性が語っているが、その中心は大正年代の15年間ほどに収まる。戦地での経験は、満州、中国全般、南方の島々、抑留体験など様々であるが、語り手の立場はその多くが将校ではなく下級兵士である。軍隊の大多数を占め、一番辛酸を舐めた一兵士たちの言葉。

奥尻のつり　2025年開幕直前号

３月になり雪がかなり溶けまして、融雪水が流入して海水温は冷えたままとなっていますが、気温の上昇は続いています。そのせいか海藻の繁茂が早いようで、ワカメの時期はあっという間に過ぎてしまいそうです。ワカメはさっと茹でると鮮やかな緑色になって、食欲を誘うような美味しそうな色合いになります。ポン酢などで食べると美味ですね。さて、1月下旬頃よりサクラマスの声が聞こえ始めました。といっても、場所や釣り人の腕によってマチマチのようで、全員が桜満開という訳ではありません。これからは大型化した個体を目指してロッドを振ることでしょう。3月に入ってからは陸からもホッケが釣れるようになりました。青苗港や宮津港が狙い目のようです。徐々に他の地点に広がっていくことでしょう。

昭和奥尻生活詩　冬休みの生活　第10回

釣石尋常小学校高等科一年生　文集「島の子」第三号

「風邪をひいたようだ」、と、言うと、母は、「むったり遊んでいるから、罰あたった」、と、言ったので、「何、仕事して遊ぶもの、いがべヨ」と、言うと、「今日だけ、仕事して遊んで口答えばっかり言うか」、なんて言うので「・・・・」、だまっていた。（母だって仕事するとき小言言うくせに）、と、思い乍ら窓の方に寄った。其の晩、トンプクをのんで寝た、床の中でボンヤリ藥袋をみたりした、袋の右上から左下に、斜めに、トンプクと大きく、其の上に、かぜ、ネツサマスと小さく、下に發行された所を上の字と同じ大きさで書いてあった。裏を見たら、四季の風邪引きに一番良いとか、頭痛に此の藥とか、大人は一日に一服御使用とか、様々書いてあった

つづく

ドカ雪三回で終了

十二月の暴風雪の後、年明けからしばらくは大人しい冬となりました。今冬は少雪なのか？と思わせておきながら、二月上旬と下旬にドン、ドンと大雪を降らせて、冬将軍は去っていきました。道内、平均すると平年並みという降雪量だったようですが、局地的、短期的に降った地点が多かったようです。本州はまさに雪害でした。

土器にドキドキ

三月一日、学芸員が福島大学へ出向きまして、作夏に青苗遺跡で発掘された擦文土器について、有識者らと意見交換してきました。八世紀～十二世紀頃まで続く擦文土器は道内各地で出土しますが、多様性があって時代によってその形状や系譜が違うのだろうということが読み取れます。研究者によって見解が分かれる部分もあり、道南日本海地方の特色をつかむことができるかもしれません。

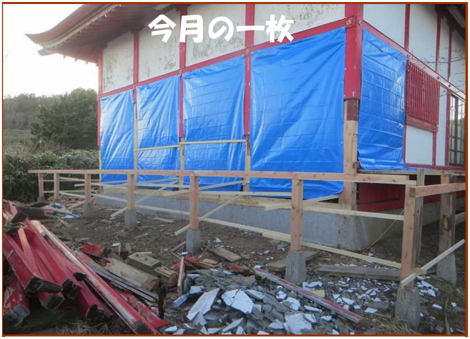
学生さんも説明に興味津々

新太之記録（編集後記）

三月は別れの季節と言いますが、本当に悲しい別れもありました。人生において避けられぬ別れは必ずあるとは言え、実際にその場面になると、様々な感情が去来します。お世話になった方ほど、思い出と共に感謝の気持ちが強くなります。それでも、残された者は前を向いて進まねばなりません。気持ちを整理し、新年度を迎えます。

宮津弁天宮の修繕着手

昨年に宮津弁天宮を修繕するためのクラウドファンディングが実施され、多くの寄付をいただきました。事業主体者となる「宮津弁天を蘇らせる会」では、地元の製材所へ木材の発注を行い、三月十五日には第一回目の資材運搬を有志の手で行いました。そこから連日作業を実施、少しづつですが、着実に修繕が進んでいます。六月位までかかるだろうと思われます。



宮津弁天修繕の様子　3月29日